Case Sachs ノ装置ニ於ケルガ如キ「アンカー」ヲ用イタナラバ二次的ニ蝕蝕が起ル恐レガアル故ニ、斯様ナル場合ニハ「アンカー」トシテ「Halbkronen」(四分ノ三金冠ニ相當ス)又ハ繼續齒ヲ選ブベキデアル。

Ⅲ) 補綴の所置ヲ装置中ニ取り入レ得ル事。

第1例 7|カラ5|マテ固室サレ其ノ中ニ 7—4| ノ架橋義齒ガ含マレテアル。

8 7 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 8

3|3|ニ接合部ガ置カレテアリ三ツノ部分ニ分ケテ装著サレル様ニナツテ居ル。即チ

イ) 7—4|ガ金冠支臺ノ架橋義齒デ之ニ3|ノ「インレー、チューブ」ガ鑲著サレテ居ル。次ノ部分ハ ロ) |4 5|ノ「Halbkronen」ト3|ノ「インレー、チューブ」ガ一體ニナツタモノデアル。第三番目ノ部分ハ ハ) 2 1|1 2|ノ「ポスト、インレー」及ビ 3|3|ノ管ニ入ル釘ガ鑲著サレテ一體ニナツタモノデアル。之ヲ装著スルニハ、イ、ロ、ハノ順ニ行フ。

斯クシテ 7 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 ハ固定サレ且 6 5|ハ補綴サレルノデアル。

第2例ハ齒槽膿漏ニ侵サレタ殘存齒ヲ固定シ、而ル後ニ缺損部ヲ補綴セントスル場合デアル。

8 3 2 1 | 1 2 5 6 7 8

斯様ナル時ニハ殘存齒牙間即チ8|ト3|竝ビニ2|ト5|ノ間ニ Steg ナルモノヲ走ラセ殘存齒牙ヲ固定シ互ニ加強サセルノデアル。(Steg ハ圓イ金屬線デ齒槽堤表面上約 1 m.m. ヲ走ルモノデア

ル)。
Steg ハ斯クノ如ク便利ナルモノデアルガ補綴スル膠ニ義齒ヲ Steg ニ馬乗りサセル様ナ事ヲスルト Steg ガ齒牙ニ惡影響ヲ與ヘル故注意スベキデアル。

コノ例ハ 1 | 1ニ接合部ガ置カレテアリ、固定ガ 8 3 2 1 | 1 2 5 6ニ施サレテ居ル。而シテ後ニ 7 6 5 4 |竝ビニ 3 4ガ補綴サレル。第1例ト同様ニ三部分カラ成立シテキル、即チイ) 8|ノ金冠ガ Steg ニ依ツテ 3|ノ「Halbkronen」、2|ノ「インレー」、1|ノ「インレー、チューブ」ノ三ツト結バレタモノ。ロ) 1|ノ「チューブ」ニ入ル釘ト1|ノ「インレー、チューブ」ノ一體ニナツタルモノ。ハ) 1|ノ「チューブ」ニ入ル釘ト2|ノ繼續齒ト一緒ニナツタモノガ Steg ニヨリ 5 6ノ金冠ト結バレタモノデアル。コノ装著ハイ、ロ、ハノ順ニ行ハレ後ニ 7 6 5 4 |竝ビニ 3 4ガ Steg ヲ利用スル義齒ヲ補綴サレル。(奈良碧)

矯 正 科

下顎前齒ニ於ケル生理的變化

physiological changes in upper anterior teeth.

By F. M. Pucci, D. C. 1933. Oct. p. 988.

1920 年ニ Gottlieb 氏ノ第一ノ研究業績ガ發表サレテ以來齒牙系統ニ對スル從來ノ概念ヲ變更ス可キ幾多ノ事柄ガ起ツタノデアルガ就中 Weski, Stein, Weinmann, Orban, Koehler, Lans-

berger, Sicher, Muller 等ノ行ツタ實驗竝ビニ研究ハ Gottlieb 氏初期ノ發見ヲ完成スルニ大イニ役立ツタノデアル。

實驗的方法ニ於テハ Oppenheim, LeRog Johnson, Appleton, Rittershofer, Marshall, 最近ニ至ツテハ Urban, Beisler, Skillen 等ノ諸氏が犬乃至ハ猿ヲ使用シテ種々ナル實驗ヲ行ヒ其ノ結果齒牙周圍組織(Pardentium)ニ起ル生理的變化ニ就テ詳細ナル發表ヲシテラルノデアル。著

第 一 圖

者モ此ノ方面ニ關シテ大イニ興味ヲ感ジ偶々肺結核ニテ死亡セル36歳ノ女性ノ上顎前齒及ビ犬齒ノ齒牙周圍組織ノ精細ナル組織的研究ヲナス機會ヲ得タノテ其ノ結果ヲ報告スルモノデアルト稱シテラル。

研究ニ供セル齒牙ハ共ニ激烈ナル咀嚼作用ノタメ共ノ切端ハ著シク磨耗シ且ツ總テノ齒根ニハ白堊質肥大ヲ認メ齒髓腔ハ切端ト磨耗ノ結果石灰化セルヲ認ム。上顎齒ハ第一圖Aノ如キ方向ニ咀嚼力ヲ受クルヲ以テ齒牙ハC及ビDヲ支點トスル一元槓桿ノ作用ヲナスモノデアルカラ、此ノ齒牙ノ周圍組織ニ起ル變化ヲ精細ニ研究スルコトハ極メテ興味アルコトデアル。著者ハ此ノ研究ニ當リ大體コレヲ六ツノ部位ニ分類シ各部ニ就テ其ノ組織的變化ヲ研究シタノデアル。即チ

(1) 舌側齒齦半部(Lingus gingival half), 索引

府。

(2) 唇側齒齦半部(Labis gingival half), 壓迫府。

(3) — (4) 齒齦部ト根端部トノ限界。支點。

(5) 壓迫及ビ抵抗府。

(6) 唇側根端半部(Apico labial half), (以上第一圖參照)

ノ六部ニ就テ各々ノ組織の處見ヲ明ニシタノデアル。一般ニ實驗ニ供セル齒牙ハ唇側ニ移動セルモノテ唇側齒根膜ハ著シク其ノ厚サヲ減セルニ反シ其ノ舌側部ニ於テハ齒根膜纖維ハ伸張セラレ齒根膜空隙ハ擴張セラレテラルノヲ認メタ。

舌側齒齦部ノ齒槽線頂ハ種々ナル特徴ヲ示シテラルガ (1) 舌側齒槽線頂ニ於テ其ノ内側(齒根膜ニ面スル部) 及ビ外側ニモ束狀骨ノ新生ヲ認メ、尙索引セラレタル齒根膜纖維ノ周圍ニ造骨細胞ノ配列セルヲ認ムルノデアルガ、コレハ齒牙ノ移動ニ依リテ生ジタル齒根膜空隙ノ擴張ヲ代償セントスルモノデアル。

(2) 唇側齒槽緣頂。

此ノ部ハ明ニ破骨機轉ノ行ハレツ、アルコトヲ示スモノデアツテ其ノ尖端ハ殆ド消失シ齒根膜纖維モ著シク壓縮セラレ遂ニ齒牙長軸ト略ボ平行ニ排列スルニ至ル。

(3) 齒齦部ト根端部トノ限界。

舌側部ニ於テハ齒根膜纖維ノ伸張ハ白堊質肥大ノ開始セル部ニ於テ消失シ骨ノ新生ナク殆ド正常ナル状態ヲ示シテラル。

(4) 唇側中央部。

破骨細胞ノ存在及ビ骨ノ吸收モ共ニ白堊質肥大ノ開始セル部ニ於テ明ニ消失シテラルコトハ前述セル所ト極メテ類似シテラル。

(5) 舌側根端部。

此ノ部ハ抵抗ヲ現ハス部位トモ考ヘラル、所テ最モ顯著ナル白堊質肥大ヲ認ムル所デアツテ、アル部位ニ於テハ骨組織ハ殆ド白堊質ト相接觸シテラルノデアル。

(6) 唇側根端部。

此ノ部ノ齒根膜纖維ハ概シテ伸張セラレ骨ノ増生ヲ認ムルヲ通則トナスノデアル。

以上ノ如キ組織の處見ヨリ著者ハ次ノ如キ結論ニ達シタノデアル、即チ此ノ實驗例ニ於テ上顎前齒ハ咀嚼機能時ニ一元槓杆ヲ形成シ下顎齒ニ依リテ上顎齒ハ絶エズ唇側ニ移動セシメントスルモノデアル。尙ホ絶エズ間歇的ニ加ハル咀嚼力ノ結果唇側齒槽緣頂ハ其ノ尖端ノミナラズ其ノ内側(齒根膜側)一帯ニワタツテ著シキ骨ノ破壊現象ヲ認メ又緻密骨ノ表面ニ於テモ穹狀吸收乃至ハ骨溶解ノ現象ヲ認ムルノデアル。然レドモ舌側齒槽緣頂ニ於テハ骨ノ増生ハ頗ル著明ニシテ、アル部位ニ於テハ殆ド其ノ厚サヲ倍加シ然モ根端部ニ迄及ブコトモアル。唇側齒根膜ニ於テハ其ノ纖維ハ壓縮セラレ殆ド齒牙長軸ト平行ニ配列ス。舌側齒根膜纖維ハ極度ニ索引セラレ且ツ根端周圍ニモ著シキ白堊質肥大ヲ認メ特ニ咀嚼力ヲ受クル部ニ於テハ最モ著明デアツテ殆ド骨ト相接觸スルニ至ルコトガアル。以上ノ如キ變化ヲ觀察スルコトハ矯正等ニ於テモ一定ノ價值アルモノデアリ、且ツ Periodontia ニ於テモ唇側盲嚢存在ノ理由ヲ説明シ得ラルルモノデアル。尙ホ更ラニ一定年齢ニ達セル患者ニ於テ前齒ノ扇狀ノ唇側移動ヲナス場合ヲモ説明シ得ルモノデアルト著者ハ結論シテラル。(高橋新次郎)

隣 接 領 域

結核菌ノ顆粒及ビ發育ニ就キテ

Über die Koernchen und Entwicklung des Tuberkuloseerregers.

Von Dr. Eduard Gröh.

Zbl. Bakter. 1 Orig. B. 128, 1933.

從來迄結核菌ノ顆粒ニ就イテノ意義ハ多クハ學者ニヨリテ、分解產物、蠟樣物質、化學的產